

2021年12月

課題本『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

加藤陽子/著 朝日出版社 2009年

80年目の12月8日

講師 吉川五百枝

著者の加藤氏は、昨年「日本学術会議」の再任拒否を受け、“時の人”になりました。拒否の理由は語られないまま今に至っています。忘れてはならない政治の流れです。

日本の現代史はさらっと学んでは居ますが、年代の前後関係は殆ど霧の中。それを強力に助けてくださったのは、例会 1 カ月前に参考資料として年表と地図を示してくださった当番のN2さんです。読みながら、赤や青色で資料をたどったおかげで、なんとか最終ページまでたどり着きました。

今の私の年代では、第2次世界大戦が日本での戦争として一番身近です。私の1945年8月は、焼夷弾の下を逃げ惑っていました。

「どうして戦争に突入したのか？」幼い時からずっと持ち続けた疑問です。そしてこの12月のテキストが『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』となって、向き合うことになりました。

加藤氏は、多くの事例を対比しながら類推して考えなさいと言われていたようですが、とにかく、加藤氏のフィールドをお借りした一ヶ月でした。

たまたま12月の例会日が8日になって、80年前の開戦日と重なりました。偶然です。

真珠湾攻撃で始まった太平洋戦争ですが、1941年12月8日が突然来たのではない。

けれど、それを幕末まで遡って日本の進行状態を集中的に読み進める事ができたのは本の力のおかげです。日清、日露、第1次世界大戦など、一章ごとに「そんなことがあったのね」と、学校時代に習った知識を引っ張り出しながら読みましたが、満州事変あたりからは、学校知識がありません。受験に間に合わない授業はフルスピードでした。

知らないことの多さは、知る驚きの多さです。

満州事変や日中戦争の一章は、私にとって、この本の最大の山場でした。

事前の資料として頂いた地図が大活躍です。日露戦争以後、日本の権益にかかわる地図上の点が、だんだん半円形の線になるのがわかります。そしてその線の周りの地名が、それ以後の事変や衝突の際に出てくるのがわかりました。

満州に日本から出かけていった人たちの話や、敗戦で命からがら帰られた人の話などは、なまなましく聞いた記憶はありますが、どのような国の動きだったのか、あらためて整理をすることができました。

満州事変の武力行使に対して、当時の人々が殆ど反対していないことは驚きでした。そこまで、人々の意思統一がなされていた。日中戦争(私の幼時の記憶では、日支事変)に積

極的意味を見いだしていた。満蒙政策は、日本国民の主権が脅かされ生存の基本原理が侵されることに対する反抗だという雰囲気満ちていたようです。

協調外交は飛び去り、これらの思考が、日本の満鉄守備兵に基礎を置く軍隊の侵攻を支えていたのです。日露戦争(1905年終戦)から第1次世界大戦(1918年終戦)を経て1931年満州事変、1937年日中戦争勃発まで、およそ30年の間に、日本、朝鮮半島、中国、ロシアの状況が大きく変わったのだと認識できました。平安時代400年、江戸時代260年の変化に比べて、激しい変化に思えます。現在に近いだけ資料も豊富で、加藤氏の説明も細かく資料を提示されています。学校知識では網羅できず、授業時間が残り少ないのもあってカットされたのかなと、自分の学習力は棚に上げて、知識の少なさを了解しました。特殊権益を巡って(自分の国でもないのに、他国同士が線引きして権益圏を取り決めるとは、なんたる不遜な)軍部と外務省と商社の素早い動きも解りました。しかし、その言い訳が、中国は無法者だというのです。それに、将来の対ソ戦争の物資調達を考えれば、当事国たる中国を差し置いて、日本の権益を満たす満蒙を守る思惑も隠せません。そしてついに、1932年満州国という傀儡国家を国家として承認してしまいます。今の時点から言えば傀儡国家ですが、日本人にそれが見えていなかったでしょう。満州国内に、日本軍が駐屯するのです。何事も腹八分が肝要だという人もあったようですが、陸軍は妥協せず新しい侵攻行動を起こして、結局、国際連盟を脱退しました。軍部の行動力に期待したのは国民です。

1937年に始まった日中戦争までの6年間、軍隊に寄せた人々の希望は、計算された組織化の前に、戦闘集団へと染脳されたようです。この6年間で、なぜストップがかからなかったのか。国民への説明を避け、思想染脳を行っていた中心はどんな思想を持っていたのか、国民は討論することもなかったのです。政党内閣は、終止符を打たされました。

加藤氏の書かれた第4章から、私がこれまで疎かった満州事変の前後の事情を教えてくださいました。今だから研究が進み、明らかになった部分も多々ありました。過去に、どのような工作が進み、隠蔽が行われ、筋のねじ曲げが行われたのかも、知ることができるようになって来ています。

実際に地図上で線を引いてみたのも今回が初めてでした。何を求めてこのラインを死守しようとしたのか。

強い英米を相手にして戦う太平洋戦争は、多くの日本人に戦争の意義を明るいものだと思わせました。ということは、満州事変も日中戦争も、強い日本が弱い中国を虐めたのではないかという恐れも持っていたということにはならないでしょうか。そういう陰りを打ち消して危機を煽り、人々をまとめて戦争を継続しようとした人々があったということでもありましょう。

〈日本が戦争をしかけて、中国の対日政策を武力によって変えようとしたことからすべては始まっているわけですが、それは日本側には自覚されません。〉東南アジアの資源の獲得は、戦争継続には欠かせないので、英仏の制空権を押さえたのだ。他国が経済的にも政治的にも日本を圧迫したから日本は戦争に追いこまれたのだという意見もあります。しかしそれは違う、と筆者はいいます。戦争を選んだのは、国民だからです。

戦争責任が問われる。だれに問うのか。1941年、私は生まれました。戦争を選んだ一人となっていました。そこから考え始めます。

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』を読んで

◆【 YA 】

栄光学園の中学生高校生の歴史研究部員17名と著者加藤陽子さんとの問答形式5日間の講義をまとめた本である。問答形式が斬新で生徒たちの研究熱心さがよく伝わった。テーマが深く重くざっと目を通すだけでも、しんどい思いをした。日清戦争から太平洋戦争まで一体どんな理由があって日本は外国に向けての戦争を始めたのだろうか。

私は日清戦争が外国に目を向けた戦争の入口ではないかと思う。この戦争で有利な結果を収め莫大な賠償金も得た。これを軍資金として次なる日露戦争、韓国併合、満州異変、日中戦争へと続き、太平洋戦争へと突入してゆく。

特に太平洋戦争への動きの中で政府と軍部の緊張したやりとりが目を引く。全ての総合力で米の力は日本の80倍。情報分析の数字からも絶対勝目は無いとわかっていても結論は出ない。石油問題や三国同盟の破棄を請求される等々理由はあったにせよ、今までの戦争から最終的には日本は戦いつつ自己の力を培養することが可能という楽観論を陸軍は報告したとある。楽観論が先行すると回避に努力を示していた海軍の意見は萎む。多分その当時、一般国民はどのような状況であるかも知られること無く、国の流れに押されてゆく。こういう流れは本当に怖いことだと思う。国民の意見、考えもその流れが本流だと考えられる。これはヒトラーがナチスを統帥したこととよく似ている。

太平洋戦争で日本人だけで310万人の命が消えている。軍の暴走を責めるだけでは済まない。違う意見や少数派の見方が如何に大切なことか。そして最後には残酷極まり無い沖縄戦、広島と長崎への原子爆弾投下で終戦を迎える。

今月の課題本、初めて知ることが実に沢山あり、知ることの大切さを改めて思う。沖縄とアメリカ間の密約文書が日本には無く、アメリカの公文書館から出たりする。

戦争に関して十分に検証が為されていないと加藤さんも書いておられるが、実にそうだと思う。戦地のことだけでは無く、一般国民はその戦時下をどのような思いで生活していたのだろうかを考える。加藤さんは問いかけていた。「もしその時を生きているとしたら、あなたはどちらの立場を選びますか。」

今年は日米開戦80年目、12月に入りテレビや新聞で映像や記事を沢山見た。殊に映像では肉声も混っており、開戦を巡る動きと、戦争が始まってからの残虐な場面も流れた。4年以上に渡る長い戦い、何故、見ず知らずの相手を殺すことが出来るのか、これが戦争の真の姿を表しているのだろう。そこに暮らしている人々と平穏な生活を、誰も略奪したり、殺戮することは許されない。

◆【 TK 】

歴史に疎くテレビで見たり聴いたりするだけで、そこだけ断片的な知識しかなく繋がりがありませんでした。年代もその当時の日本人の歴史の状態も。

今回この本を読んで繋がりが具体的な心境がわかりました。そして、今の海外の紛争と経済

も関心を持って聞けるようになりました。

真珠湾攻撃から80年でタイムリーな本でもありました。

日本人は原爆のことばかりで反省がないとは、やはり本当だと思いました。中国、アジア等を貪欲に攻略したところに原因があると思います。人のものを勝手に武力で自分の配下におくのを最近のニュースで色々聞きますが、それと同じ事をしていた日本は恥ずかしく思うのが当然だと思います。

民主主義を広めて人の自由を認めるアメリカは偉いと思います。

ベトナム、ロシア、中国、台湾まだまだ現代でも経済外交と共に内紛も絶えません。

世界的に巻き込まれる戦争が1914年から始まると預言されていましたが、これから先ももっともっと明確になっていくことでしょう。

◆【 F 】

大切な人が亡くなった時、人はどうして死んでしまったんだろうと答えのない問いを抱え、その答えを求めるように人とは異なる現実を作り出すのかもしれない。と、実体験を通して思っている。客観的に観測されるという意味での正しい現実とは乖離しているので「幻実」と当て字した方がしっくりくるだろうか。

「戦争によって多くの命が失われた後の社会では、新しい社会契約がなされる」と、あった。また「戦争は相手の国の価値観、憲法に対する攻撃」だということも書かれていて(おそらくこれらは作者の持論なのだろうが)目から鱗が落ちたと言いますか、なるほどそういう見方(冷静になって分析をすること)ができるのかと思った。

開戦から80年が経過したとはいえ、まだ太平洋戦争は過去の歴史として切り離して考えることは難しく国際政治や各個人が抱えている国のあり方や教育観と絡み合っていて、個々人で意見が大きく分かれていることを、今回の読書会に参加して、あらためて実感した。

年が明けると自分は30才になるが、この本の元になった集中講義を受けた高校生たち(朝日新聞の切り抜きを持ってきてくださった方がいたので知ることができました!)がちょうど今年30だったので、自分と歳が変わらない。だから、自分の頭の中にある太平洋戦争のイメージや自分との関わりをここに書いておくことは意味があると思うので参考までに書き出しておく。

戦争については小学校で徹底的に教え込まれた印象が強い。実際に戦争を体験した祖父母が身近にいて、話を聞いて作文を書くのが夏休みの宿題だった。8月6日に平和登校があり戦争のビデオ(広島に原爆が落ちた日のアニメ、貞子さんの千羽鶴を題材にした実写ドラマ、撃沈された疎開船対馬丸の悲劇を題材にしたアニメ映画、ジブリの「火垂るの墓」など)を見たり、高齢者から食べるものがなくてひもじい思いをしたことや空襲の思い出を聞かせて”いただいたり”した。(あれ、そういえば・・6年生の夏休みは戦争じゃなくて盲導犬のビデオを見た。なんで今年は戦争じゃないんだろうと不思議に思った記憶が今蘇った)。ここ

で”いただいたり”と書いたのは、当時の小学生の感覚だからで、毎年聞かされてる(?)先生は少し気乗りしていないように見えた。

中学以降は学校で戦争について平和学習することはなく、同級生の中には殺しのゲーム(戦争を題材にしたタイトル以外でも、車を運転して歩行者を引くことができる自由度の高いもの。殺虫剤で襲いかかってくるゴキブリを倒してスコアを競う個人が作ったミニゲーム。恐竜のような巨大モンスターを狩猟する今も有名タイトルのゲーム)に興じる者もうようよと出始めた。というより15禁と指定されている創作物には残酷なものも多く年代もあるだろう。インターネットが自由で寛容で広がり始めた時代(小学校5年生ごろにパソコンの授業が始まった頃)だったからこそ残酷なものは学校と相反する価値観の場としてぼくらの手の届く場所にあったように思う。

平和教育の根幹は「命は大事」というシンプルな価値観で、それは戦争に限らず自然災害やいじめ自殺問題も同じように学校では語られていたように思う。そして最近ではブラック企業(過労死)に対して同じ理屈が使われている気がする。ところで、命が大事、それは誰の命だろうか？

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を読んで感じる、たった虫けら一匹にも命を認めて愛しんでやる気持ち。これが「命は大事」(という価値観)だ！ と説明すると分かりやすいだろうか。

↑ これは自分が思い付いたのではなく、道徳関係の冊子か何かで誰かどこかのエライ先生が語っておられたのを妙に納得した体験から自分のものになった考え方。

◇ 命が大事、という人が、私(筆者であり貴方)の命を大事にしてくれるとは限らない。

命に対して今の自分の立場を明らかにすると「蜘蛛の糸」を曲解したようなものと言えたい。虫の命は人の命と同じように尊ぶべきものだし、裏を返せば他人の命は私に仇なす虫ケラと同列になりうる。

部屋に迷い込んだのがカメムシならわざわざ逃がしてやろうとする一方、躊躇なく踏み潰す人がいたら、人格を疑いたくなる。

できるなら何も感じずに命を奪えるような人間は苦しみながら死ねばいいのにと(そうはいっても実際は、虫に鋭敏に反応できることに驚き、自分にできない事やっけてのけた虫殺しでさえも愛おしくなって話し込んでしまうので)願えるようなイメージの人になりたいと思う。どうして自分が歪んでしまったのかというと、きっかけは明白である。命は大事だと漠然と信じているだけじゃ、自分なんて誰も救ってくれない存在なんだという事を知ってしまったからだ。植え付けられた価値観なんてその後の体験によってどんどん変化していってしまう。

果たして小学校の時に受けた教育に叛いてしまっている自分は、特別なんだろうか。

大学生の教職の授業で戦争についての講義の中で「第二次世界大戦なんて関ヶ原の戦いと同じに感じる」といった女の子がいた。たくさんの方が亡くなったとか、苦しい体験をした

なんて言われてもそれは過去の出来事で、人類の歴史の1ページで想像できるものじゃないと言いたいのか。誰も口に出している事をしないが、彼女は素直だっただけでアレが世の中一般の価値観だと思う。2020年(昨年)の時点ですでに、広島でさえ夏休みの平和教育はなくなったと聞く中高生の間ではスマホで知らない人とチームプレイを楽しめる戦争ゲームが流行していた。

小学校の教育自体が、今は変質しまっているかもしれない。

今年になって、テロリズムと認定される密室の列車内で民間人を標的にした事件が3件あった。社会的にどん底(だと本人が悲観している状態)で失うものが何もない「無敵の人」が起こした事件だという解説に自分は納得する。

彼らは間違いなく自分だ、と感じる人はこの読書会に参加している年代の方達には少ないんじゃないかと勝手な想像が働く。そして、命は大事なのに、どうしてあんな恐ろしいことができてしまうのかと義憤して日本社会の変貌を嘆いたり、されておらんじゃろうか？

彼らは彼らで、私が私であるのと同じように、自分のことは自分でしかわからないし(自分でもわかりきっていないにせよ)とにかく他人が言う私が私であるはずはなく、本当のところ何が原因でテロるのかは分かりようがないけれど今回の課題本にあった戦争の説明が当てはまらないか。

「戦争は相手の国の価値観、憲法に対する攻撃」

国内のテロは、我らの社会を覆っている価値観、常識への攻撃。

作者は最後に今あらためて反省する必要があるを書いてたが、自分はそれは戦争という行為に対してだけではなく、多くの人を亡くした後の社会が新たに作り出した価値観に対してもなされるべきだと思う。命が大切なのは自明の理だ、そこから一步踏み込んだ考え方を話し合いたい。

◆【 MM 】

今年一読みにくかった課題本ではなかろうか。全部を読み切らないまま読書会に参加した。

読書会のあと一週間で感想文を書いて提出するのがルールである。課題本を読み直さないといけないのだが、その合間に違う本を手にとった(読まないといけない本があるのに読みたい本を読んでしまう…)。そこに書いてあったことは今月の読書会で得た言葉と似ていた。私がつい手にとってしまった本は歴史とは違う分野だったが、歴史について言及していた。「大事なものは、何年に何が起きたなどと出来事を覚えることではなく、歴史上の人物の生き生きとした人柄が心に思い浮かぶこと」「歴史をよく知るという事は、自分自身をよく知るということと全く同じこと」。この言葉に出会ったときすぐ今月の読書会を思い出した。読書会では「自分がその時代に生きてどうふるまったか」「自分で知ろうとする、考える」「知らないこと

が考えをゆがめる。だから過去を知る、考える、前に進む」という言葉が出た。課題本の中で著者は中高生にそれぞれの戦争に関していろんな質問を投げかけて生徒に考えて答えてもらっていた。戦争は過去に起こったこと、という認識ではなくその中にいて自分だったらどう振舞ったか、考えたか。

偶然手に取った本によって課題本や読書会で出た言葉が再び私の中に入ってきた。最初に読んだときは情報量が多くて嫌気がさしてしまっていたが、今回は3章「第一次世界大戦」から読んでみた。日本は第一次世界大戦での死者は全体に比べると格段に少なかった。過去の日露戦争で出た日本の死者数と比べても少なかった。しかしこれでよかったと終わるわけではなく将来の戦争についても予測していた。植民地の拡大の理由について他の帝国主義と日本との考え方の違いについても初めて知った。一度は読んでいたはずなのに理解していなかったのだろう。今回はおもしろいというか興味をもって読むことができた。

しかし再度読んでも感想文にはうまくまとめられない。最初よりは戦争を身近に感じることができたのに。再読すると戦争に関わった人も人間なのでそれが自分だったら？その時代に自分も生きていたなら？という目線で読むことができた。

学校で日本史を習ったとき、近現代史はぐちゃぐちゃして駆け足で詳しいことがわからな
いまま大人になった。知ろうと思えばいくらでも資料はあった。見てこなかった。たまに日本史や世界史の本を借りたが流れをさらうだけで理解はしていなかった。知ろうとはしていなかった。戦争に参加した個人としての本を読んだことはあったが国としてどう考えていたのかという本は読んだことがなかった。今回いろいろな事実を知ることができてああそうなのか！と思ったが自分だったらどうするか、までは至らない。今はまだ理解までいっていないのだと思う。この本はひと月以上あっても全部読めなかった。しかし教科書というか戦争を考える本としてはとても好きな本となったので買うことにする。